

## 源信僧都の母の話（補説）

— 今昔物語集卷十五第三十九をめぐって —

高 橋 貢

### はじめに

今昔物語集一千話の中で読者を感動させ、共感を呼ぶ話の一つに源信僧都の母の話（卷十五第三十九「源信僧都母尼往生語」）がある。私は以前「仏教文学研究Ⅳ」（昭和四十二年五月、仏教文学研究会編、法蔵館刊）の中でこの話をとり上げて幾つかの問題点を指摘し、述べた。その要点を記すと、一、これまで何人かの研究者がこの話の魅力を指摘している。二、この話の主題は源信の母が往生することであるが、話の裏に流れる二義的な主題として名聞利養から逃れること、母と源信との間に、きびしくはあるが人間味豊かな愛情が通っていることを指摘することができる。三、右の二義的

主題は源氏物語「手習」巻の横川僧都の言動、及び源信僧都自身の思想の中にも見出すことができる。四、この話は元来は首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳、及び延暦寺首楞嚴院源信僧都伝に記されているような簡単な話であつたらう。またこの話の伝承の過程には横川とつながりを持つ人々が関係を持っていたと考えられる。五、源信、及び源信周辺の人々に関する話の伝承には横川と関係のある人々の

影響が強かったと思われる。六、平安時代中後期の人々の源信、及び源信周辺の人々に対する信仰、支持、関心は大きかった。七、この話は今昔物語集以外の説話集等にもとられているが、今昔物語集の話がもっともよく整っている。

なおこの話のごく大きな要旨を書いておく。この話を段に分けると前後二段に分けることができる。第一段は源信が三条大后の法花八講に召されて賜わつた物を母に送つたところ、母からはかえつて名僧になつてはならないといましめられた。第二段はそれから九年目のこと、源信は胸騒ぎを覚えたので故郷に行くと、母は臨終の間際であつた。源信は母に念仏をすすめて往生をとげさせた。

### 西尾実氏の御教示から—中世的共同体意識の芽生え—

私が今昔物語集の源信僧都の母の話に注目し、仏教文学会（当時はお茶の水女子大学に本部があつた。）で発表したのは十年前のことであつた。その時法政大学名誉教授西尾実氏が御不自由な体でありながらお出でになり、私の発表について二、三お教えをいただいた

た。その後御住居をうかがう機会があったが、御子息の光一氏（山梨大学教授）をまじえ、お話をいただいた。その時西尾氏は源信僧都の母の話が中世文学と係りあいの深い話であるという指摘をされた。即ち源信と母が協力して源信が聖人となり、母が往生するという目的を達成したところに中世的共同体意識の芽生えを見ておられる。

その後西尾氏の論文を読み、教えられるところが大きかったが、中でも早く大正九年十月と十二月の「信濃教育」に「小さい暗った鏡」「紙衣の導師」「横川法語」という題の下で源信僧都の母の話を含め、今昔物語集の源信話を取り上げておられるのを知り、驚嘆を感じた。今昔物語集の源信話を見ると、少年時の修業の出発点では、自分が小さい暗った鏡―暗昧小劣な自己―であることを素直に肯定し、暗昧な自己をみがいて明るい大きな鏡にして行くことに人生の意義を知るわけであるが（特に卷十二第三十二「横川源信僧都語」）、その過程における源信の成長の苦闘と磨瑩の努力の姿が描かれていることを西尾氏は指摘されている。源信話の特色の一は、他の多くの仏法話―高僧話、靈驗話、往生話等―に超人的な性格、あるいは奇蹟、奇蹟的な要素が付与されているが、源信話にはそのような性格、要素が少なく、より人間的な面が出ていることである。源信の母の話もまた同様であって、未完成の源信が母の激励によって努力する、一方母が死ぬ時には音楽が聞こえ、紫雲がたなびくというような奇蹟が現われぬという、一見平凡ではあるが、他の説話とは違った親しさ、身近かさを感じる。また超自然的性格の多い話の中にこのような話が置かれてあると、この話が珠玉のように貴

重な存在のように思われて来る。また源信は往生要集等の著作や二十五三昧会等の実践を通して大勢の人々に浄土に往生する方法を教えているが、この源信の人格が源信母の話にもあらわれている。

少し長くなるが、西尾氏が源信母の話について述べられた箇所を引用する。

「幼い恵心（源信のこと）はふとした事から叡山のある僧侶に認められ、後に慈恵大僧正とよばれた碩徳、良源和尚に迎へられてその門に入り、十三歳の時、剃髪受戒して源信と号けられた。

其頃の恵心は、世を離れた善の「叡山社会」の中心に居り、名利を棄てた善の僧侶達が争奪の渦中に居た。しかも彼は天質の豊かな彼である。忽ちの間に其力は認められ、其名は広く知られたものらしい。村上天皇の天曆十年六月、宮中の清凉殿に法華八講が開かれた時、十五歳の恵心は講師として招かれて殿上の人々を感嘆せしめた。八講が畢つて後、捧物を給はつて、これを大和国なる母の許に手紙と共に贈つた。

母は傑れた天質の彼を生んだのみでなく、彼の天質を磨いて真人格の光あらしめる上にも亦母であつた。返事していふには、

「遣せたまへる物共は喜んで給はりぬ。かくやむごとなき学生に成りたまへるは、限りなく喜び申す。但し此様の御八講に参りなどして行きたまふは、法師になし聞えし本意にはあらず、そこには微妙じくおほすらめども、嫗の心には違ひにたり。

嫗の思ひし事は、女子は数あれども、男子はそこ一人なり。それを元服をも為させずして比叡山に上げければ、学問して身の才よくありて、多武峯の聖人の様に貴くて、嫗の後世を救ひたまへ

とも思ひしなり。それにかく名僧にて華やかに行きたまむは本意に違ふことなり。

われ年老いぬ。生きたらむ程に、聖人にしておはせむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか。」と書かれてあつた。

この世には容易に有得ない、しかも眞の母らしい言葉に、衷なる恵心はどんなに感激したか。彼は眞実な彼の道が其処に展げてゐるのを見得たであらう。直ちに「山籠り」の決意を以て折返し返書した。それに対して母は、「今なむ胸落ち居て、冥途も安く覚ゆる。返すく喜びしく思聞ゆ。ゆめくおろそかにおはずべからず」と書き送つた。

かうして三十歳頃から横川の谷に引籠つて、読書と浄行とに専念するやうになつた恵心のその第一歩は、この母尼の手紙からの感激が有力な素因を為してゐることは言ふまでもない。

この手紙のことによつても明かであるやうに、恵心の母は熱誠道を求めて已まぬ人であつた。その母のために、幼い時に自分の木像を刻んで贈つた恵心は、今また自己の明め得た心の道を伝へようとして「勸進往生偈」を書いて母に贈つたりした。

かうして叡山の北、横川谷の物静かな別天地に、「小さい暗つた鏡」を磨きつゞけた恵心は、一夜、明月が大空に澄んで、松籟もその声を潜めた頃、彼はふと看經の座を立てて堂の高縁に出で立ち、心静かに念仏せられた。横川谷の大気は森々と身に泌みわたつて、さながら身は眞如そのものとなつたやうに感ぜられ、夢心地にほれ、と念仏を続けられた。

やがて其の場を起つて帰られる途すがら、彼はふと思ひついた

源信僧都の母の話(補説)——今昔物語集卷第十五第三十九をめぐつて——

やうにかう呟かれた。「あゝ、今は悪魔に魅せられてゐた」と。

彼は最後まで自然美に無関心であり得る人ではなかつた。この点に於て詩人的宗教家であり、宗教的芸術家として伝ふべきもの大ききを持つてゐたのである。けれども彼の努めて求めた道はさういふ世界ではなかつた。その葛藤に彼の絶えざる悩みがあり、また汲めども尽きぬ懐しさが湧く。かういふ彼の性格はもつと後節に詳しく考へて見たい点である。(以下省略)

前述したように西尾氏から御教示をいただく機会があり、その時氏は源信母の話に中世的共同体意識の芽生えを見ておられた。氏はその著「中世的なものとその展開」(昭和三十六年十二月、岩波書店)では行動的共同体制(中世文芸の展開、一六六頁)と言われている。氏はまた中世的なものとしての地方的、武士的要素が今昔物語集にあると見ておられ(七十九、一五四頁)、今昔物語集の典型的な例として源信母の話と卷二十五第十二「源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語」を上げておられる。

ただ右の西尾氏の説に少し補促させていたたくとすれば、源信僧都は比叡山の奥横川で二五三昧会、靈山釈迦講という浄土教の実践的な運動を、志を同じくする人々と共に行なつてゐるが、ここにこそ氏の言われる中世的共同体、あるいは行動的共同体制の源泉が認められると思う。またこの講会に参加した人々のうち何人かは、例えば明快、覚超、仁康等——今昔物語集にも登場している。

なおまた私の師である早稲田大学教授国東文麿氏は、源信僧都に見られる実践的な信仰が今昔物語集等に見られる源大夫の出家、往生の話(卷十九第十四「讃岐国多度郡五位、聞法即出家語」)等に

見られる今昔物語集の特色であり、ここに中世的なものとの関連を見ておられる（注、私的な御教示による）。

いづれにしても源信の母の話を含めた今昔物語集は中世的なものとの関連、源泉として重要な位置を占めており、いろいろな問題をはらんでいるわけであって、この問題を西尾氏が指摘されたことは貴重であった。

## 二

### 源信母のいう聖人の理想像

源信・増賀の話の場合

源信僧都の母の話の初めに、源信が三条大后の御八講に召されて賜った物を母に送ると母からいましめの手紙が来た。それに対して源信は返事を書いてるが、この中で母は源信に向かって、名僧になるな、多武峰の増賀聖人のような聖人になって欲しいと励まし、源信も名僧になろうという気持はなく、母の仰せに随つて山籠りをして聖人になりますと誓っている。左に母と源信との手紙の本文を掲げる。

母の手紙……遣セ給ヘル物共ハ喜テ給ハリヌ。此ク止事無キ学生ニ成リ給ヘルハ、無レ限ク喜ビ申ス。但シ、此様ノ御八講ニ参リナドシテ行キ給フハ、法師ニ成シ聞エシ本意ニハ非ズ。其ニハ微妙ク被思ラメドモ、嫗ノ心ニハ違ヒニタリ。嫗ノ思ヒシ事ハ、「女子ハ教有レドモ、男子ハ其一人也。其レヲ、元服ヲモ不令為ズシテ、比叡ノ山ニ上ケレバ、学問シテ身ノ才吉ク有テ、多武ノ峰ノ聖人ノ様

ニ貴クテ、嫗ノ後世ヲモ救ヒ給ヘ」ト思ヒシ也。其レニ、此ク名僧ニテ花ヤカニ行キ給ハムハ、本意ニ違フ事也。「我レ、年老イヌ。生タラム程ニ聖人ニシテ御セムヲ心安ク見置テ死ナバヤ」トコソ思ヒシカ。

源信の返事……源信ハ、更ニ名僧セム心無ク、只、尼君ノ生キ給ヘル時、如レ此ク止事無キ宮原ノ御八講ナドニ参テ、聞カセ奉ラムト思フ心深クシテ念ギ申シツルニ、此ク被レ仰タレバ、極テ哀レニ悲クテ、喜シク思ヒ奉ル。然レバ、仰セテ随テ山籠リヲ始テ、聖人ニ成ヌ、「今ハ値ハム」ト被仰レム時ニ可参キ。不レ然ザラム限りハ山ヲ不レ可レ出ズ。但シ、母ト申セドモ極タル善人ニコソ御マシケレ。

今昔物語集には頻繁に聖人（または聖<sup>註</sup>）が登場し、また聖人という語もたびたび用いられている。それらの中でも特に源信母の話の場合、聖人を名僧と対比させて意識的に用いており、源信が聖人になるのを一つの理想としている。源信母の話の場合、源信は母のいましめに従つて世俗的な名聞利養から逃れ、山籠りすることによつて修行、学問し、母の臨終に立ち会つて母に念仏をとなえさせて静かに息を引きとらせている。この話で今昔物語集撰者は源信が聖人になつたと言いたかったのであろうが、この話からだけでは聖人とはどういうような人を指すのか、はつきりしない。そこで今昔物語集の他の話をとり上げて、今昔物語集という聖人とは何か、何を意味するのか、あるいは源信の母が考える聖人とはどのような理想像なのかを調べてみたい。源信母は源信に対して多武峰の増賀聖人のように貴く、母の後世を助け導くような人になつてほしいとすすめ

た。源信の目標とすべき理想的な人は増賀聖人であった。それでは今昔物語集では増賀をどのように扱っているであろうか。増賀は今昔物語集の数話に登場するが、その一つ巻十二第三十三「多武峰増賀聖人語」をとり上げる。

この話で増賀が四歳になった時、母の夢に尊げなる聖人の僧が現われて「此ノ兒ハ、宿因有テ聖人ト可成キ者也。」と告げた。その後比叡山に登って慈恵大僧正良源の弟子となつて、法花経を習ひ、顯密の法文を學し、やんごとなき学生になつた。また毎日法花経一部と三時の懺悔を怠らなかつた。そうこうしている間に道心堅固におこり、現世の名聞利養を捨てて、後世菩提のことだけを思い、狂氣の様を振舞つて、多武峰に籠つて法花経を誦し念仏をとえ、後世を祈つた。また三七日の間三時に懺法を行なうと、夢に南岳・天台兩大師が現われて「善哉、仏子、善根ヲ修セリシ」と告げた。こうしている間に増賀は尊い聖人であるという評判が立ち、内裏から御持僧にしようとしてお召しがあつたがことわつた。やがて八十歳になつて死期を知り、執念を去つて、法花経を誦し、手に金剛合掌の印を結び、西に向かつて入滅した。——この話は本朝法花験記巻下第八十二「多武峰増賀上人」にあつて、増賀が学生になる所までは今昔物語集と一致するが、以後は相違する。そこでこの場合今昔物語集の話の方に焦点をあわせて論を進める。増賀以外の話も同様である。

この話の中のどこが聖人としての条件に合うのかというと、まずやんごとなき学生になることは聖人とは違ふ。なぜなら源信母の話の中でも源信が三条大后の御八講に出て母にいましめられたのは源

信がやんごとなき学生になつて以後の話である。その後増賀は道心堅固におこり、現世の名聞利養を捨てて後世菩提のことだけを思い、多武峰に籠つて法花経を誦し念仏をとえ、条件であつたことになつた。——本朝法花験記の場合も大体同様である。

このことを増賀話の前の話、巻十二第三十三「横川源信僧都語」について見ると、大体同様のことが言える。即ち源信は比叡山横川に登つて小さく曇つた鏡をみかけという夢を得て比叡山に登り、増賀と同じく慈恵大僧正良源の弟子となつて学問修行し、僧都になつた。その後道心が深くなつて名聞を離れて横川に籠り、法花経を誦し念仏を唱えて一途に後世菩提を祈つた。そして一条要決、往生要集を著述し、浄土信仰を世間に布教するようつとめた。その頃、観音や毗沙門が夢に現われるという奇瑞があつた。最後の時になつて都率天の弥勒仏の使である天童が現われると、源信は極樂に往生して阿弥陀を礼したいと言つて没した。

この話の場合、僧都になるまでは聖人とは言えないが、道心深くおこつて横川に籠居して以後の源信は聖人といつてよい。最後になつて現われた天童も源信にむかつて「我等ハ此レ、都率天ノ弥勒ノ御使也。聖人、偏ニ法花ヲ持シテ、深ク一乘ノ理ヲ悟レリ。此ノ功德ヲ以テ兜率天ニ可レ生シ。然レバ、我等、聖人ヲ迎ヘムガ爲ニ来レル也。」と言つており、源信を聖人と呼びかけている。——この話は本朝法華験記巻下第八十三「楞嚴院源信僧都」にある。大体同内容であるが、細部になると相違点が多い。——なお横川の浄土教信仰者はこの話の中でも源信母の話の中でも「聖人達」（巻十二第

三十二は「院ノ内ノ止事無キ学生並ニ聖人達」(《本朝法華驗記は「院内名徳学徒」》、卷十五第三十九は「横川ノ聖人達」)といわれて  
いる。

(4)

#### 日本靈異記における聖人像

平安時代の現存する最古の説話集は日本靈異記である。日本靈異記にも聖人(聖を含む)が登場する。日本靈異記の聖人を見ると、僧を尊んで聖人という場合、仏を指して聖という場合等色々な場合がある。それらの中で比較的、日本靈異記における聖人の理想像はつきりするものを左にとり上げる。

1、卷上第四「聖徳皇太子、異しき表を示す縁」は聖徳太子に関する話を記している。話の始めに太子の三つの名の由来を記した中で聖徳の由来について「進止威儀僧に似て行ひ、加以勝鬘法花等の經の疏を製り、法を弘め物を利し、考績功勲の階を定むるが故に、聖徳と曰ふ。」と記している(①)。また太子の逸話の一つに片岡村の路傍に病臥している乞食(笑は隱身の聖)と問答する話を記しているが、その後「誠に、聖人は聖を知り、凡夫は知らず。凡夫の肉眼には賤しき人と見え、聖人の通眼には隱身と見ゆと。」と記している(②)。(この話の類話は今昔物語集卷十一第一「聖徳太子、於此朝始弘佛法語」にあって、①については「三八聖徳太子教ヲ弘メ人ヲ度シ給ヘレバ也。」と記している。)

2、卷上第二十二「勤めて仏教を求学し、法を弘め物を利し、命終はる時に臨みて異しき表を示す縁」は道照法師に関する話を記している。道照は入唐して玄奘三蔵の弟子となり、帰国して仏法流布

に力をつくし、最後は西方極樂に往生をとげている。道照の帰国後の事績について「此の土に到り、弾院寺を造りて止まり住む。時に戒珠玷ぐることも無く智鑿恒に耀く。遍く諸方に遊び、法を弘め物を化す。遂に禪院に住み、諸弟子の為に、請けたる所の衆經の要義を演暢ぶ。(以下省略)」と記している。また話末に「贊に曰く」として「船の氏、徳を明かにし、遠く法蔵を求む。是れ聖にして凡に非ず。没して光を放つ。」とする。(類話は今昔物語集卷十一第四「道照和尚、亘唐伝法相還來話」にあって、話の初めに「今昔、本朝、天智天皇ノ御代ニ道照和尚ト云フ聖人在マシケリ。(中略)智リ広ク心直シ。亦、道心盛リニシテ、貴キ事仏ノ如ク也。然レバ、世ノ人、公ヨリ始奉テ、上下ノ道俗・男女、首ヲ傾テ貴ビ敬ヘル事無シ限シ。」と記す。)

3、卷上第七「智者、変化の聖人を誹り妬みて、現に閻羅の闕に至り、地獄の苦を受くる縁」は行基に関する話を記している。話の初めに行基の人となり、及び事績について「俗を捨て欲を離れ、法を弘め迷を化す。器宇聰敏くして、自然生知る。内に菩薩の儀を密にし、外に声聞の形を現はす。聖武天皇、威徳に感ずるが故に、重みし信く。時の人歎み貴び、美めて菩薩と称ふ。天平十六年甲申の冬十一月を以て、大僧正に任ず。」と記している。また話中、行基は死んで閻魔庁にある黄金の宮殿に生れること、及び神通力を有することを記す。話末には「智光法師、行基菩薩を信じ、明かに聖人なることを知る。」と記している。(類話は今昔物語集卷十一第二「行基菩薩、学仏法導人語」にあって、行基がさとり深いこと、慈悲のあること、神通力を有することを記している。また今昔物語

集でも行基を聖、聖人と称している。)

4、巻中第二十九「行基大座、天眼を放ち、女人の頭に猪の油を塗れるを視て、呵噴する縁」は3、5と同じく行基に関する話を記している。即ち行基が説法している会場の中に髪に猪の油を塗った女がいるのを行基が見つけた話であるが、話末に「凡夫の肉眼には是れ油の色なれども、聖人の明眼には、見に夾の血を見る。日本の国に於いては、是れ化身の聖なり。隱身なり。」と記す。(同話は今昔物語集巻十七第三十六「文殊、生行基見女人悪給語」にあつて右の部分。「今昔、行基菩薩ト申ス聖在ス。(中略)此レヲ思フニ凡夫ノ肉眼ニハ油ノ色ヲ見ル事無シ。聖人ノ明眼ニハ穴・血ヲ見ル事顕也。然バ、行基菩薩ハ此レ、日本国ノ化身ノ聖ノ、身ヲ隱セル也ケリトナム語り伝ヘタルトヤ。」と記す。)

5、巻中第三十「行基大徳、子を携ふる女人の過去の怨を視て、淵に投げ令め、異しき表を示す縁」も行基の話を記すが、人々が行基を「慈有る聖人」と批評している。(同話は今昔物語集巻十七第三十七「行基菩薩、教女人悪子給語」にあつて「慈悲広大ノ聖人」と記す。)

6、巻下第十七「未だ作り畢はらぬ捨瓊の像、呻ぶ音を生じて、奇しき表を示す縁」は「沙弥信行に関する話である。即ち信行は紀伊国の弥氣山室堂内の像が未完成なのを見て「当に聖人有りて、因縁を得令むべし。」と祈り願っている、元興寺僧豊慶が現われて信行と協力し、知識を集めて像を完成する。信行が祈願していた聖人が豊慶に当るわけであろう。

7、巻下第三十三「賤しき沙弥の乞食を刑罰して、現に頓に悪死

源信僧都の母の話(補説)——今昔物語集巻十五第三十九をめぐって——

の報を得る縁」は紀直吉足が葉師経十二葉叉の神名を誦持する自度僧を迫害して死んだ話であるが、話に続けて「自度の師たりと雖も猶忍の心もて闢よ。隱身の聖人、凡中に交るが故なり。」と批評している。

右の七例から日本靈異記の聖人像を搜ると、聖人自身が仏道に到達し、すぐれた智恵を有することはもちろんのことであろうが、それ以外に一、生れながら才智がある。二、法を弘め物を利す。三、慈悲心がある。四、神通力を持つ。五、仏菩薩が守護する。六、人々が尊敬し、また帰依する。七、死後善所に趣く。等の性格を持っていると見ることができよう。——もちろんのことであるが、聖人によつては右全部の性格を持つてゐるとは限らない。

#### 今昔物語集における聖人像

右にとり上げた日本靈異記の話は大部分今昔物語集にも同類話がある。今昔物語集のそれらの話に登場する人々、聖人達も右に列挙した聖人像に近いものと見てよい。それでは先に上げた源信母の話、増賀の話に見られる聖人像は右に列挙した日本靈異記の聖人像と同じかという点必ずしも同じではない。主な相違点は、一、名聞利養から逃れる。二、後世菩提を祈る。三、西方極楽に往生することである。その違いを時代的に見ると、平安時代以前の主に奈良仏教が全盛であった時代と平安時代中期に特に浄土信仰が盛んになってから以後の時代との違いであろう。今昔物語集には前者の時代の話と共にとり上げているが、源信母の話の場合、後者の時代の影響の方が濃い。そこで右にとり上げた日本靈異記に同類話があるような

話中から聖人像を抽出しても、源信母のいう聖人の理想像と一致するとは限らない。また弘法・伝教大師等巻十一に登場する高僧も「今昔、弘法大師ト申ス聖御ケリ。」(巻十一第九「弘法大師、渡唐伝真言教帰来語」)「今昔、桓武天皇ノ御代ニ、伝教大師ト云フ聖在マシケリ。」(巻十一第十「伝教大師、亘唐伝天台宗帰来語」)のように今昔物語集で聖人、聖といわれているが、源信母の話の内容から類推すると、これらの高僧は日本靈異記の系統の話の聖人と同じく、源信母にとって直接的に理想的な聖人像であったとは思えない。これらの高僧は入唐して仏法を学び、帰朝後法を伝え、寺院を建立し、朝廷等に尊敬され、重く用いられている。源信母のいう聖人の理想像は、これらの聖人よりはむしろ後者の時代の影響が濃く見られる今昔物語集の話から聖人像を抽出した方が近いと考える。このような考えから、先に源信、増賀の話から聖人像を出したが、他の後者の時代の影響が濃く見られる話を数話選んで聖人像を抽出してみよう。

最初の段は性空上人伝に同話がある。)

2、巻十五第十四「醍醐觀幸入寺、往生語」は觀幸入寺の話を記す。即ち觀幸は仁海僧正の弟子となって東寺の入寺僧になる。ところが「堅ク道心発ニケレバ、本寺ヲ去テ、忽ニ土佐国ニ行テ、偏ニ名聞・利養ヲ棄テ、聖人ニ成テ、」修行する。死を予期して念仏を唱えて往生する。

3、巻十五第二十二「始雲林院菩提講聖人、往生語」は雲林院の菩提講を始めた聖人の話である。この聖人は盜賊であった。検非違使に捕われ、足を切られる時になって相人に助けられる。のちに道心を発して誓を切つて法師になり、弥陀の念仏を唱えて往生を願う。雲林院に住して菩提講を始める。命終る時に「極テ貴ク」失せる。(同話は宇治拾遺物語巻四第六「東北院菩提講聖事」にあるが、今昔物語集の「雲林院ト云フ所ニ、菩提講ヲ始メ行ヒケル聖人」が「東北院の菩提講はじめける聖」になっている。)

4、巻十七第二「紀用方、仕地藏菩薩蒙利益語」は紀用方が地藏菩薩に帰依し、阿弥陀仏の念仏を日夜唱えたため、阿弥陀の聖の夢に用方が地藏になって現われた話であるが、話中阿弥陀の聖について「世ニ阿弥陀ノ聖ト云フ者有ケリ、日夜二行キ、世ノ人ニ念仏ヲ勧ムル者也。」と記している。(同話は三国因縁地藏菩薩靈驗記巻一の五「武藏介用方蒙靈感事」にあつて、阿弥陀の聖について「忠実房トテ聖侍リ」として名を記す。)

5、巻十七第三十九「西石蔵仙久知普賢化身語」は仙久持経者(または聖人)に関する話である。即ち仙久は西石蔵の山寺に住して法花経を誦誦し、念仏を唱え、極樂に生まれることを願う。常に法



文に向かつて学問する。道心並びなく、人々に慈悲心がある。人々は「若シ普賢ヲ見奉ラムト思フ人アラバ、西石蔵ノ山寺ニ住ム仙久聖人ヲ可見シ。此レ、普賢ノ化身也。專ニ可近付シ。」というお告げの夢を見て仙久と結縁する。臨終の時、念仏を唱え、法花經を誦して死ぬ。人々はこのことを聞き、ますます信をおこす。(同話は本朝法花驗記卷上第三十八「石蔵仙久法師」にある。人々がお告げの夢を見る所は「若欲見普賢、當親近石蔵寺仙久聖人。」とある。)

6、卷十九第三「内記慶滋保胤出家語」は慶滋保胤に関する話を記している。即ち若い時から公に仕えて博士になるが、「年漸ク積テ道心発ニケレバ、」誓を切つて法師になる。一般に内記聖人と呼ばれている。「出家ノ後ハ空也聖人ノ弟子ト成テ、偏ニ貴キ聖人ト成テ有ケル間」仏像を造り、堂を建てるのが最上の功德と思ひ、人々から寄進を集めるため播磨国に下る。その時法師陰陽師が生活のために紙冠をしてお被いをするのを見て陰陽師の紙冠を引き破るが、陰陽師の話聞いて人々からの寄進を全部陰陽師に与える。この時、陰陽師が保胤に言う言葉の中に「道心無レバ身ヲ棄タル聖人ニモ難成シ。」とある。その後東山の如意に住んでみると、六条院からのお召しで行く。ところが馬が歩くのにまかせて行くのでなかなか着くことができない。そこで馬の舎人男が馬の尻を打つと、保胤は「前世の親をどうして打つのか。」と怒る。このようにして半時で行ける道のりを半日かかかつて着く。また石蔵に住んでいる時に下痢をする。それを老犬が食べようと待っていると、保胤は「前世の悪心によつて獣の身になったとはいへ、あるいは親であつたか

もしれない方に不淨の物を食べさせるのは申しわけない。明日おいしい物をさし上げよう。」と泣く泣く言う。翌日食事を作つて食べさせようすると、他の犬も集つて食い散らすので板敷に逃げ上る。話末に「内記ノ聖人ト云テ知り深ク道心盛リニシテ止事無カリケリトナム語り伝ヘタルトヤ。」と評している。(保胤が陰陽師の紙冠を破る話は宇治拾遺物語卷十二第四「内記上人法師陰陽師紙冠破事」にある。右に上げた陰陽師が保胤に言う言葉は「道心なければ上人にもならず。」とある。)

右の話のうち3、4、5は正確な話のおこつた年月は不明であるが、内容から類推して平安時代中期の話と見てよい。

右にとり上げた聖人の特色として、一、名聞利養から離れる。二、後世菩提を願う。三、法花經を誦す。四、念仏をとなえる。五、慈悲心がある。六、靈驗がある。七、仏菩薩の加護がある。八、人々が帰依する。九、西方極楽に往生する。等を指摘することができる。なお聖人によつてはこの特色全部を含むとは限らないし、また西方極楽に往生するのではなく都率天に生まれる人もいるが、主としてこのような特色を持っているといえよう。また源信母の話の場合、源信自身が聖の道を求める人であると共に、母に代表させているが、他人を往生に導く利他の人としての立場が強く出ている。

なお前述したように、卷十二第三十二、卷十五第三十九の横川の浄土教信仰者を聖人達、あるいは横川の聖人達といっているが、この傾向は他の話についてもほぼ同様である。一部の話に例えば卷十七第十「僧仁康、祈念地藏遁疫癘難語」には「横川ノ人々」(同

話の三国因縁地藏菩薩靈驗記卷一第七にはこの一文なしとあるが、大部分の話―卷十二第二十四「関寺駝牛、化迦葉伝語」、卷十四第三十九「源信内供、於横川供養涅槃経語」、卷十九第四「撰津守源満仲、出家語」、卷二十第三十三「比叡山横川僧、受小蛇身語」―には「横川ニ□□ト云テ道心有ル聖人」(卷十二第二十四。同話の古本説話集卷下第七十「関寺の牛の間む事」には「横川に、えさうといひて、たううある僧」とする。)、横川ニ諸ノ道心ヲ発セシル聖人達」(卷十四第三十九。)、横川ヨリ然タノ聖人達ナム御シタル」(卷十九第四。類話の古事談卷四所収話にはこの一文はない。)

とあつて、同類話を収める他の書物と比較しても、横川の僧、あるいは浄土信仰者を聖人と意識して用いる。

源信母のいう聖人は右に指摘したような聖人像を指すと思われる。今昔物語集の話の中には聖人(聖を含む)の登場する話、及び聖人という語を使っている話が多い。それらの中で特に源信の母の話は他の話以上に聖人を意識して用いている。そこで今昔物語集の聖人、あるいは聖人像を問題とする時、源信の母の話を見過ぐすことはできず、また聖人が登場する諸話を代表する話の一つであるといふことができる。

## まとめ

本論文は以前同題で発表した論文の補説である。前論文の要点は最初に記した。本論文で述べたことは、一、前論文でとり上げることのできなかつた西尾実氏の大正九年の論文を紹介した。また西尾氏から示唆をいただいたことから、氏がこの話に中世的共同体意識

の芽生えを見ておられること、及びこの話が中世的なものと関連をもっており、また中世的なもの源泉として重要な位置を占めていたことを述べた。二、源信母の話では聖人を名僧と対比させることによつて、源信が聖人になることを理想としている。そこからこの話で言おうとしている聖人の理想像とは何かを他の話を参照することによつて考えた。

注、聖、上人、聖人の違いについて、井上光貞氏(岩波書店「日本古代の国家と仏教」二一五頁)は「阿弥陀聖・小田原聖などと固有名詞的によばれたものには山林修行、苦行、遊行、入水、焼身など、異常な宗教的靈力や行為を示す行者が多いのに対して、上人には都市や農村に定着し、隠棲して自利の業を積み、又は講や説法などによつて人々の尊崇を集めたものが多いからである。」と述べておられる。また今成元昭氏(「聖」・「上人」の称について)国士館大学文学部人文学会紀要、昭和四十八年一月)は尊貴性に重きを置く場合に聖、具体的人物を指呼する場合に聖人の語を用いること、及び上人とは念仏系聖を、褻の場・褻の意識で称する場合に用いる語であり、晴の場・晴の意識においては念仏系聖といへども聖人とされたいことを指摘された。この今成氏の御指摘は原則的には賛成であるが、今成氏も指摘されているように、聖と聖人の区別については本稿にも例があるが例外的場合がある。また打聞集等にも聖と記している場合がある。また望月仏教大辞典にも聖人、上人、聖についての項があつてそれぞれ説明を加えている。聖人については「聖智を証得せる見

道以上の人を云ふ。」と記し、中阿含經等の經典を引用している。

付記：本論文で引用した本文は、今昔物語集、日本靈異記、宇治拾遺物語は日本古典文学大系、本朝法花驗記は続群書類従、三國因縁地藏菩薩靈驗記は古典文庫にそれぞれよった。